



こんぴらさん障壁画の謎

—若冲・岸岱をめぐって—

【第3章】

奥書院障子裝飾之記

上段の間《百花図》に款記・印章はみられないが、伝承では作者は伊藤若冲であるという。昭和34年(1959)から昭和35年(1960)にかけて行われた奥書院解体修理の際、春の間から「奥書院障子裝飾之記¹⁾」という障壁画の沿革を記した修理札が発見された。

明和甲申之歲障子修補焉東
条七右衛門掌於其事使富永
善兵衛新井与三兵衛裝飾于
障子矣舊障子中録此事省文
不詳殿中悉皆白紙而使藤若
冲畫之矣上段之間花丸二之
間山水三之間杜若廣間垂柳
自明和至今茲天保甲辰之歲
殆八十年柱楹戸闌或朽障子
紙中上裝頗蠹於是柱楹障子
之朽蠹新修葺之矣上段之間
用舊畫而已二三廣間則欲以
金紙裝飾之使岸岱畫之雖未
全畢巧障子之質既成故預記
沿革以示後代

川崎重周謹録

天保十五年甲辰年

真光院宥瑜	作事奉行	手代	棟梁
	片岡權右衛門	三井又八	綾九郎右衛門
菅納馬影信			元蔵
	川崎四郎兵衛	粟井平蔵	米蔵
菅納実政宜			張物師
			与兵衛

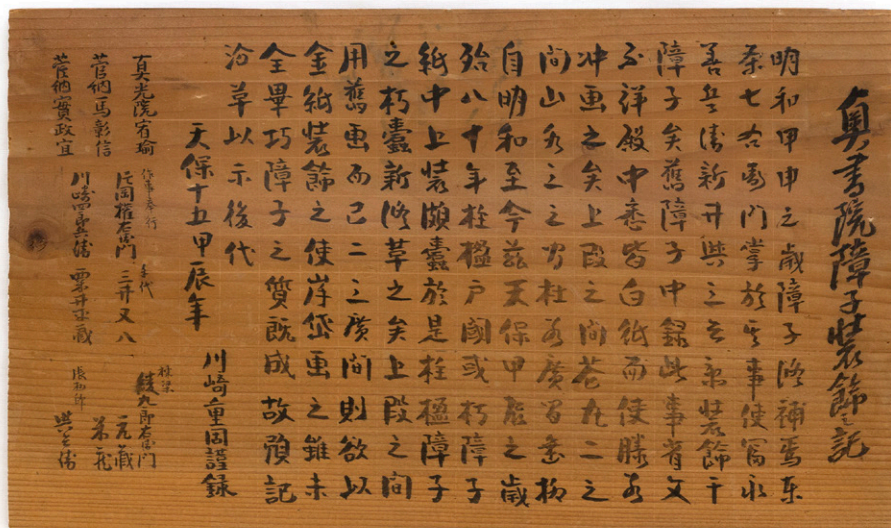
明和元年に襖を修理した。御座敷内の襖はすべて白く、この紙に伊藤若冲に描かせた。上段の間は花丸、二の間は山水、三の間は杜若、広間は垂柳だった。明和から天保15年まで80年経って柱や戸も朽ち、襖は中も表面もかなり虫害(紙魚)があった。柱や襖の朽ちて虫害があるものを新たに修理し改めることにした。上段の間だけ旧画(花丸)を用い、二の間、三の間、広間は紙を金箔で裝飾して岸岱に描かせた。といった内容が書かれてある。

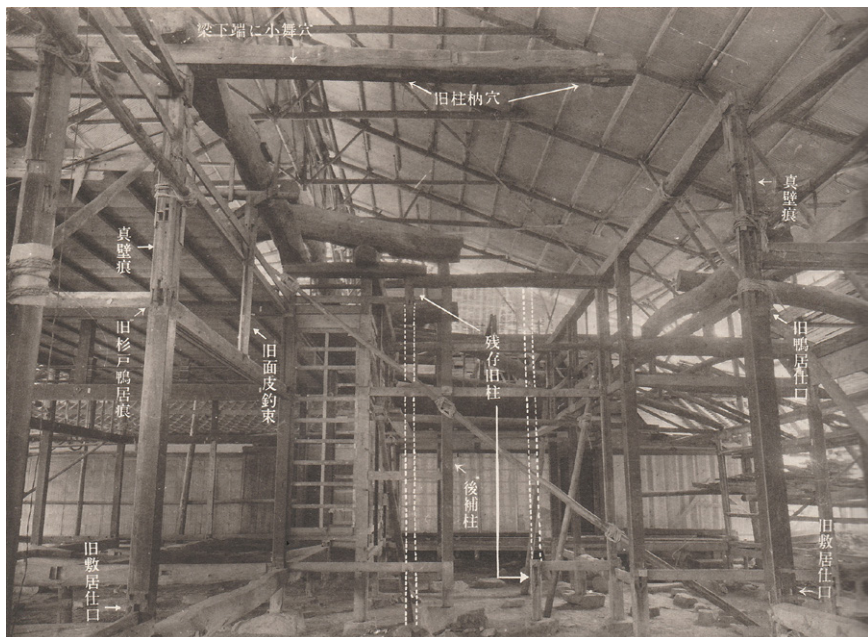
これにより若冲が奥書院障壁画を制作したという所伝は天保15年(1844)までさかのぼることができる。この修理の際、建物の各部修繕も同時に行われ柱の一部取替等もなされたものと思われる。

棟梁の綾九郎右衛門は弘化2年(1845)落成した金堂棟梁の一人とみられ、明治11年(1878)本宮建築の棟梁・綾担三の父である²⁾。

この修理札から、《百花図》は天保15年の時点では《花丸》という名称であったことが分かる³⁾。明和元年(1764)に襖を修理したとあり、この年に若冲が描いたとは記していないが、明和元年前後に若冲が描いたと考えてよいだろう。若冲が京都から出向いて金毘羅に滞在し制作した可能性はあるが、来社した記録は確認できず、金毘羅の使者が京都まで取りに行ったか、応挙と同じように京都から絵だけを送ったのだろうという説もある⁴⁾。

若冲が描いた二の間《山水》、三の間《杜若》、広間《垂柳》の名称から、岸岱は画題を引き継ぎ各室の制作をしたことが分かる。撤去された若冲の《山水》《杜若》《垂柳》がその後どのように処理されたかその消息を記す金毘羅当局の史料は見当たらない。

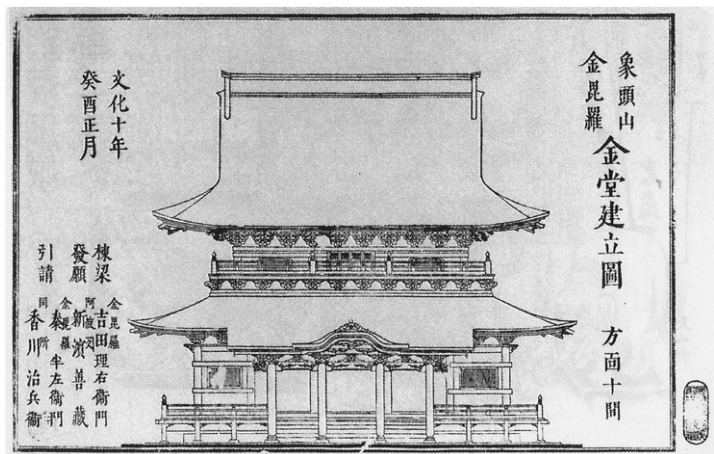




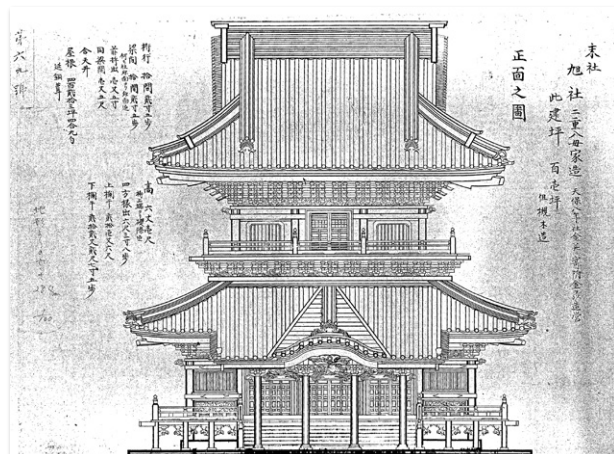
【奥書院修理工事報告書】第39図
旧上段の間（現在春の間）残存資料



【奥書院修理工事報告書】第46図
旧上段の間（現在春の間）残存資料



象頭山金堂建立圖（『町史ことひら5（絵図・写真 編）』より転載）



旭社(旧金堂)正面図

1 ①『奥書院修理工事報告書』p.42、写真第118図
 2 ②大崎定一氏論文。「本宮屋根裏記」別記に、綾坦三の父は綾九良右衛門で金堂棟梁と記される。大崎氏は、金刀比羅本教教会の霊簿に綾九郎右衛門坦三の父として山下九郎右衛門豊章の名がみられ、豊章の名から金堂棟梁として史料に記される河野越後豊章は同人と推定している。綾坦三は文書によって綾坦三、凌丹造と記される。西牟田崇生「黎明期の金刀比羅宮と琴陵有常」国書刊行会、2004年に採られている各記事をみていくと、p.271『金刀比羅宮史料』9巻「自明治六年三月取扱記録」明治10年4月15日御本宮上棟祭の記事は「大工棟梁 凌丹造」、p.275『町史ことひら2近世近代・現代史料編』から引用の金刀比羅宮社務「日誌」同年4月15日の記事は「綾坦三」、p.318『年々日記』明治11年4月20日の記事は「棟梁綾坦三」と記される。
 3 ③『百花図』は昭和49年、香川県指定有形文化財に指定されてからの名称であり、天保15年(1844)の修理札の記録では「花丸」と記される。明治40年5月『金刀比羅宮記』初版

では上段の間を「花之間」と称し《草花図》、明治45年3月『金刀比羅宮記』第2版は《草花図》、大正11年9月『金刀比羅宮記』第3版は《花卉図》、大正15年5月『金刀比羅宮記』第4版は《花卉図》と記される。明治41年(1908)金刀比羅宮が作成した宝物台帳では貴書146に《草花図》と記される。昭和35年2月2日～14日に開催された「讃岐金刀比羅宮名宝展」(会場:東京・日本橋三越7階ギャラリー)には《草花之図》と記される。明治40年以前の呼称は確認できていないが、明治40年以降、金刀比羅宮では《草花図》《花卉図》の名称を用いたようだ。現在は《花丸図》《百花図》の名称を使用しているが、本稿では名称の使い分けにより煩雑になることを避けるため《百花図》で通すこととする。
 4 ④土居次義氏は③『讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲』『國華』p.20で若冲は金刀比羅に逗留したと思われると述べ、佐藤康宏氏は④『もっと知りたい伊藤若冲』p.60で京都から絵を送ったと推測している。

参考文献

①『重要文化財金刀比羅宮奥書院修理工事報告書』金刀比羅宮奥書院修理委員会、1960
 ②大崎定一「天保八年建立のこんぴらの金堂—いまの旭社について」『ことひら』28号、pp.13-17、1973
 ③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』1046、pp.11-20、1981
 ④佐藤康宏「もっと知りたい伊藤若冲 生涯と作品」東京美術、2006